



## [オシャカ]

鑄造分野では一般人にわかりにくい業界用語がたくさん使われますが、それが一般世間で使われるようになっていく例が「型にはめる」と「オシャカになる」ではないでしょうか。「型にはめる」はどちらかというと悪い教育法などを指して使われ、「型」が悪者あつかいされていますが、型をたいせつに思っている鑄物関係者としてはいささか心外です。

「オシャカ」も失敗作を指す悪い意味の言葉ですが、これは本家本元の鑄造分野でもそういう意味だから仕方がないですね。この語源は、阿弥陀像を鑄造しようとしたのに光背があまりに薄肉で湯周り不良となり、光背のない仏像になってしまい、これではまるで釈迦像ではないかと言った、と説明されています（広辞苑、あるいは「金属の凝固を知る」新山、丸善）。

ところがあらゆる語源探しと同様にこれにも異説があります。それによると、金属を溶接するとき火が強すぎて失敗し、「火が強かった」の音が「四月八日だ」に通じるところから（シとヒをいっしょにしたのは江戸っ子にちがいない）、シャレてこの日が誕生日である「お釈迦」の名を借用したというのです（日本語源大辞典、小学館）。これはあまりにコジツケが強すぎないか、という感じがする一方、江戸の粋な職人たちならいかにもこんな地口をよろこびそうな気がします。

ただ鑄造工学の専門の立場からすると、この第二の説でひっかるのは溶接というものがその時代にあったかな、という疑問ですが、鑄掛とかロウ付けなどはあったでしょうし、そもそも金属加工に詳しくない言語学者が鑄造と溶接を混同して語源辞書に書いたのかもしれない。

そこで仮にこれも鑄造の話だとすると、火が強ければ焼き付きや吹かれになるし、火が弱ければ湯周り不良になる、というわけで、どっちもありうる不良現象です。したがって技術の立場からどちらかの語源説に軍配をあげることは残念ながらできないように思うのですが、どうでしょうか。